

シーボルト『NIPPON』の書誌学研究

—『NIPPON』の透かしと配本状況—

宮崎 克則

The Bibliography Research of Siebold 'NIPPON'

—The Watermark of 'NIPPON' and Distribution—

Katsunori MIYAZAKI

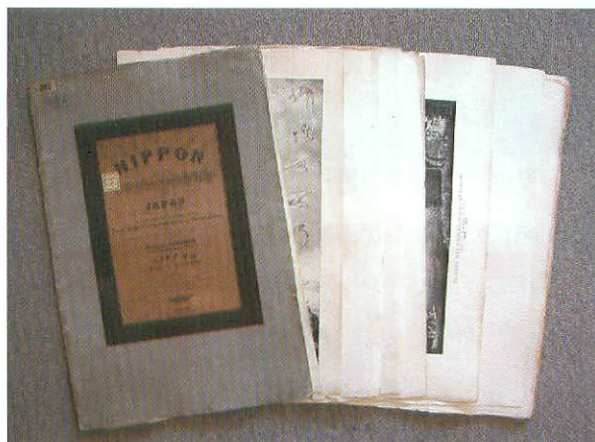
九州大学総合研究博物館：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

The Kyushu University Museum: Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581, Japan

1. 九大本『NIPPON』

江戸時代、長崎にやってきたシーボルトは（1796～1866年 在日期間1823～1829年）、帰国後に『NIPPON』を出版し、ヨーロッパに日本を紹介した。『NIPPON』には、当時の日本国内でも重要機密として公表されていなかった伊能忠敬の調査に基づく日本地図などが紹介され、また農村や都市の風景・風習などを描いた絵が数多く載せられている。

九州大学の附属図書館医学分館に、医学部法医学教室が大正15年に3000円で購入した『NIPPON』図版の1冊（図版10数枚）が展示されていた。図書館職員の方の説明では、1冊し



『NIPPON』図版、第1分冊

かないとのことであったが、「もっとたくさん他にあるはず」と調査を依頼した結果、平成13年の夏、書庫の隅から大量の図版と本文編（テキスト）が再発見された。

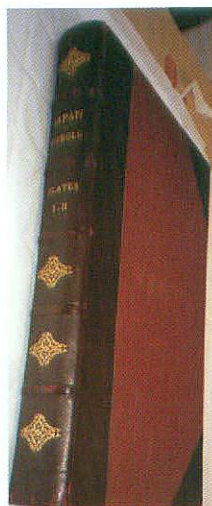
『NIPPON』に収録された図版は、総数367枚であるが、医学分館に残る分は4枚ほどが所在不明となっている。それらは、図版の通し番号も提示すると、

113号 京都の全景

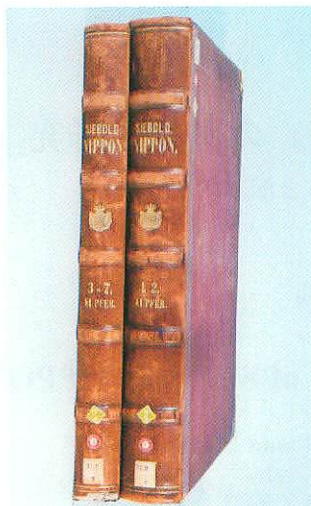
123号 江戸の全景

361号 蝦夷海峡—最上徳内の原図による

367号 付図 日本人の作成による原図および天文観測に基づく日本地図—九州、四国および本州



「永青文庫」本

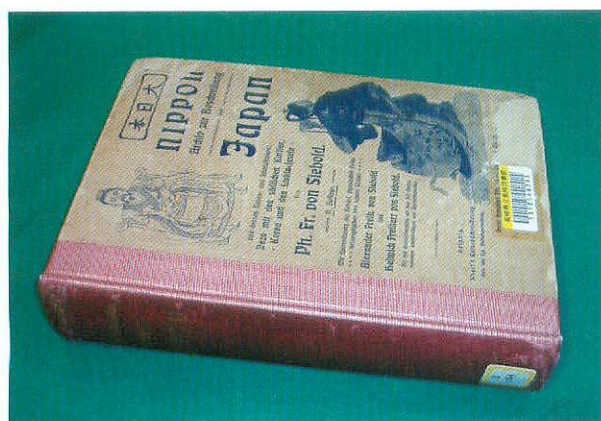


「慶応大学」本

である。

『NIPPON』は、図版編と本文（テキスト）編からなり、1832年から約20年間にわたって（1858～59年頃に完結したともいう）、オランダのライデンで出版された。少しオランダ語も混じっているが、ほぼドイツ語で書かれている。シーボルトの自費出版で出された『NIPPON』は、当初は150～200部ほど、最後は60部が出されたにすぎなかった⁽¹⁾。

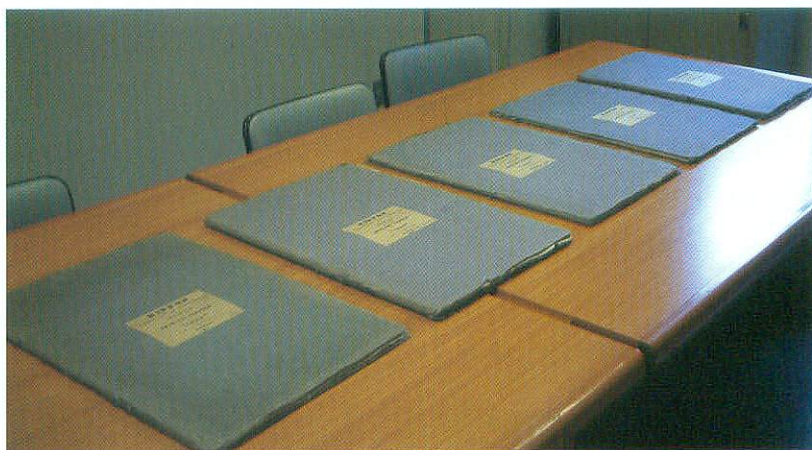
『NIPPON』は、製本して出されたのではなく、分冊で出され、後に購入者がそれを製本所に持ち込み、自分が気に入った表紙を付けて製本した。東京の財団法人「永青文庫」や慶応大学が所蔵する『NIPPON』は豪華に製本されている。これら製本された『NIPPON』の多くは、図版編が2冊に、本文編が3冊に製本されている。ただし、製本の過程でページの異動や欠落が起こり、現存する『NIPPON』初版本の一つとして同じものはないといわれる。しかもシーボルトは、通し番号をつけなかったので、混乱はなおさらであった。



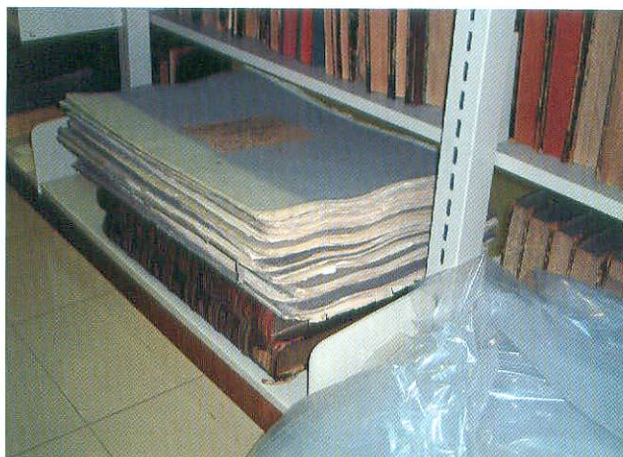
『NIPPON』第2版（長崎県立図書館蔵）

『NIPPON』の第2版は、シーボルトの息子たちが中心となり、日本からも多くの華族が後援して1897年に、彼の生誕100年を記念して出版されたが、これは初版と大きく異なり、削除されたり、追加された部分が多く、内容的にも形態的にも初版本と比べて大きく異なっている。

九州大学医学分館の『NIPPON』は、初版本であり、しかも製本されていない。従来、未製本の『NIPPON』は近畿大学中央図書館にもあることが明らかであったが、それは図版130枚ほどが欠落しており、しかも初版と異なる図版も混入している。1973年に購入された近畿大本に比べると、九大本はかなり良質であり、配本当時の様子をそのままに伝えている世界的に希少な資料である。



「近畿大学」本



再発見時の『NIPPON』

『NIPPON』図版には「色つき」版・「色なし」版があり、「色つき」版である九大本の販売価格は、308ターラだった。当時の平均的な労働者の年収が120～160ターラ、ケルン市の教頭の年収が500～700ターラだったというので、かなり高額であった⁽²⁾。

九大本は決して良好な保存状態にあったとはいえず、ビニール袋に入れて保管されているにすぎなかった。現在は、分冊ごとに中性紙の箱に入れ、図版1枚ごとに紙を挟

んで保管している。カビのある図版もあり、それらを除去する作業もしなければならないが、今後の課題として残っている。

ここでは、九大本に残る「INHALT（内容）」から、『NIPPON』がどのように配本されたのかを明らかにするとともに、『NIPPON』図版に用いられた紙のウォーターマーク（透かし）について、書誌的検討を行なう。なお、『NIPPON』初版本については、これまでに講談社から復刻版、雄松堂から日本語版が出されている⁽³⁾。

2. シーボルトと『NIPPON』

フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルトは、1796年2月17日、ドイツのヴュルツブルクで誕生した。父はヴュルツブルク大学の医学部教授ゲオルグ・クリストフ・フォン・シーボルト、母はアポロニア・フォン・シーボルト（旧姓 ロッツ）。その長男として生まれた⁽⁴⁾。

シーボルトは、医学者の子として幸せな幼年期を送ることができるかに見えたが、1798年に父が31歳の若さで急逝したため、母は2歳にも満たないシーボルトを抱えて、兄フランツ・ヨーゼフ・ロッツのもとに身を寄せた。伯父ロッツの保護を受けて育ったシーボルトは、1815～20年にヴュルツブルク大学医学部に在籍し、外科学の理論と実践的な外科治療を学んだ。

長崎にやってきたシーボルトが、日本人門弟の前で見せた手術、とくに眼科の新しい手術や臨床医学に必要な知識は、大学教育のなかで取得されている。当時、ヴュルツブルク大学では外科学の理論と実証的な外科治療を大学教育のなかで組み合わせる試みがなされていた。彼が日本で名医として高い評価を得ることができたのは、理論と実践の両面にわたって、高度な技術と知識を備えていたからである。また、植物学・動物学が医学教育のカリキュラムとして組み込まれており、シーボルトが日本で博物学的調査を実施するとき大いに役立った。

シーボルトは、大学を卒業後、開業医となっていたが、オランダの軍医総監から一通の手紙が届いた。それは、オランダのハーグに来て国王の外科医にならないかという内容であり、彼はすぐに返事を書き、オランダに勤務することを願い出た。当時、オランダ国王ウィレム一世

は、東インド会社の新会社、オランダ貿易会社設立のために新しい医者を探していた。それは、オランダ国内のどの医者よりも優れた最新の技術をもち、あらゆる分野において豊かな知識をもつ者でなければならなかった。オランダの軍医総監がシーボルトの父に師事していたこともあり、彼に白羽の矢が立てられた。1822年5月22日、シーボルトは26歳にしてオランダ国王の宮廷外科医となり、すぐにバタビアへ派遣される。

バタビア（現 インドネシアのジャカルタ）は、オランダによるアジア経営の拠点であったが、当時のはなはだ混乱していた。ナポレオンによるヨーロッパ席卷によって、オランダは革命フランスの勢力下となり、バタビアもオランダ領からフランス領へ、そして後にイギリス領となり、1816年にふたたびオランダ領となっていた。バタビアの支配権を回復したオランダは、新たに日本との貿易を再開するため、ジャワ総督府に命じて日本の総合的調査を行うことにした。調査すべき分野は産業・社会・文化のほか政治・軍事・科学・植物・動物などにおよんだ。そうした調査がシーボルトに課せられた課題であった。

1822年9月23日、シーボルトを乗せたアドリアーナ号はロッテルダム港を出帆し、無事にジャワ島バタビアに到着した。彼は日本での調査費用として1827フルデン（約3800万円）を与えられ、日本への土産として物理学・電気学・力学などの書籍や器具などを買い集めた。シーボルトは、1823年6月28日にバタビアを出港し、8月11日に長崎に到着した。航海は43日であり、順調な航海であった。

長崎にやってきたシーボルトは、オランダ人たちが「国立の監獄」と呼んでいた出島に閉じこめられることになったが、来日翌年の1824年（文政7）、長崎奉行はシーボルトに長崎の町で塾を開く許可を与えた。こうしてシーボルトは出島から外へ出ることができ、多くの日本情報を収集することが可能となった。彼は、郊外の鳴滝に塾（鳴滝塾）を設け、実地診療のかたわら高野長英ら数十名の門下生に医学・博物学などを教えた。そして、門下生にレポートを課した。それは医学ばかりでなく、日本の歴史・文化などについてオランダ語で提出させた。

それらの論文は、シーボルトが『NIPPON』を執筆する際に大いに役立つこととなる。シーボルトは『NIPPON』の執筆において、約100年前に同じく医師として来日して『日本誌』を著したケンペルを意識している。ケンペルにおいては、日本の北方地域、現在の北海道やサハリンについての情報が少なく、シーボルトの時代には世界的にも日本の北方地域に関心が集まっていたので、彼はその情報を実際に探検した最上徳内・間宮林蔵から直接に入手することができた。それらの情報は、伊能忠敬の調査に基づく日本地図などとともに機密情報であり、一部は「シーボルト事件」によって幕府に押収されたが、シーボルトは収集物を何度にも分け、便船があるたびにオランダへ送り出していたので、『NIPPON』に紹介することができたのである。

地図だけでなく、外国人が日本を研究すること自体が禁止であった。シーボルトはいう。

「国土の調査、国家、宗教制度、軍備、その他政治的関係や施設に関する研究は、外国人に対しては非常に厳しく禁じられている。国民に対しても非常に厳しい法律があって、外国人にそれらのことを知らせたり、また何らかの方法で外人がそれらを調査する場合に力を貸すことを

厳禁している」（『NIPPON』ⅡⅣ章 小倉から下関への渡航と下関での滞在）。しかし現実には、そのような建て前を踏まえながら、関門海峡の水深を測るシーボルトを見て見ぬふりをしたり、動植物や鉱物などに関する自然科学情報、歴史・文化・政治情報をシーボルトに提供する日本人は少なくなかった。

3. 『NIPPON』の透かし（Watermark）

『NIPPON』図版に使用された紙の透かしを一枚ごとに調査した結果、もともと図版に使用された紙は、縦59.5センチ×横79センチの大判であることが分かった。図版には、見開きの図版があり、それには「VANGELDER」の透かし模



見開き図版



通常図版

様が中央下部にある。そして、見開きでない通常の図版には、下部あるいは上部に「VANG」



VANGELDER

のみ、あるいは「ELDER」のみの透かしがある（「ELDER」の「E」が消えている場合も多いが、それは切断されたからである）。つまり、『NIPPON』の図版を作成するに当たっては、当時のオランダで定評のあった

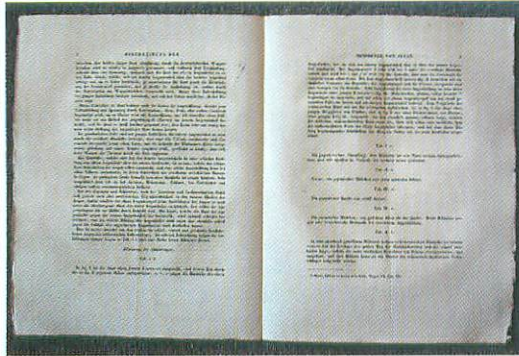
ファン・ヘルダー社製の縦59.5センチ×横79センチの大判の紙が購入され、大きな地図などを描く場合はそのまま使用されたが、多くの場合は半分に切断されて、石版で印刷されたのである。日本から持ち帰った原画を石版画に描き直したのは、オランダの芸術家ヘンリー・ハイデマンス（Henri Ph. Heidemans）・ナーダ（L. Nader）・エルクスレーベン（J. Erxleben）たちだった。



図版の基本的な大きさである縦59.5センチ×横39.5センチの図版を肉眼で見えていくと、4辺のうちの1辺に切断された跡を確認できる。

『NIPPON』に使用された紙の透かし模様は、「VANGELDER」の他に、同じファン・ヘルダー社製の「VG」のマークのあるもの、透かしのない3種類がある。

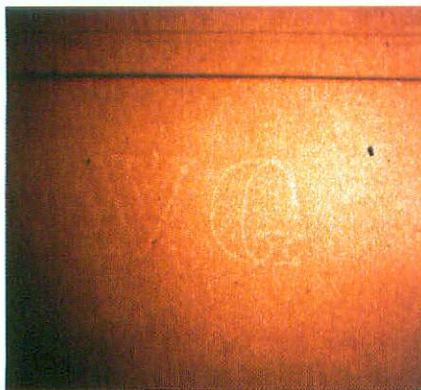
『NIPPON』本文編にも同じ3種類の紙が用いられている。しかし、図版の場合と異なり、マークは右横あるいは左横に付いている。本文編の大きさを計測すると、横59.5センチ×縦39.5センチの見



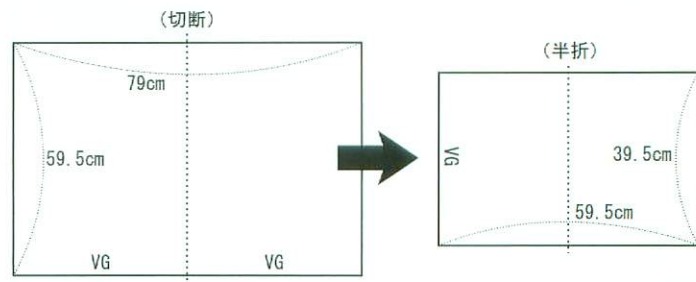
『NIPPON』本文

開きで印刷されている。つまり、縦59.5センチ×横79センチの大判の紙を半分に切断し、これに両面に印刷して半分に折れば本文編ができるのである。ただし、テキスト編に使用された紙は、図版の紙と比べると薄い紙が用いられている。

図版に用いられた透かしの一覧をあげておく。



VG



シーボルト『NIPPON』図版の透かし

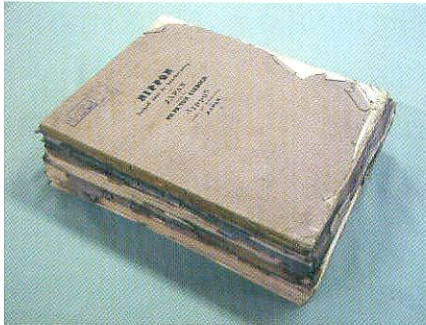
通し番号	マーク	通し番号	マーク	通し番号	マーク
口絵	VANG	52	VG	105	VG
序文	ELDER	53	ELDER	106	VG
1	ELDER	54	ELDER	107	VG
2	ELDER	55	ELDER	108	ELDER
3	ELDER	56	ELDER	109	VG
4	VANG	57	ELDER	110	VG
5	VANG	58	ELDER	111	VG
6	VANG	59	ELDER	112	なし
7	ELDER	60	ELDER	113	所在不明
8	ELDER	61	VANG	114	VG
9	VG	62	VANG	115	VG
10	ELDER	63	ELDER	116	VG
11	VG	64	ELDER	117	ELDER
12	ELDER	65	ELDER	118	VG
13	ELDER	66	ELDER	119	VG
14	VG	67	VANG	120	VANG
15	VANG	68	ELDER	121	ELDER
16	VANG	69	ELDER	122	VG
17	ELDER	70	VANG	123	所在不明
18	VANG	71	VANG	124	ELDER
19	ELDER	72	VANG	125	ELDER
20	VANG	73	ELDER	126	VANG
21	ELDER	74	VANG	127	VANG
22	ELDER	75	VANG	128	ELDER
23	VANG	76	VANG	129	VANG
24	VANG	77	ELDER	130	ELDER
25	VANG	78	VANG	131	ELDER
26	VANG	79	VANG	132	VG
27	VANG	80	VANG	133	VANG
28	VANG	81	ELDER	134	ELDER
29	VANG	82	VANG	135	VANG
30	ELDER	83	ELDER	136	ELDER
31	VANGELDER	84	VANG	137	VANG
32	VANGELDER	85	VANG	138	VANG
33	VANGELDER	86	VANG	139	ELDER
34	VANGELDER	87	VG	140	ELDER
35	VANG	88	ELDER	141	ELDER
36	ELDER	89	VANG	142	ELDER
37	ELDER	90	VANG	143	VANG
38	ELDER	91	ELDER	144	ELDER
39	ELDER	92	ELDER	145	VANG
40	VANG	93	VANG	146	VG
41	ELDER	94	ELDER	147	VANG
42	ELDER	95	ELDER	148	ELDER
43	VANG	96	ELDER	149	VANG
44	VG	97	ELDER	150	VANG
45	VG	98	ELDER	151	VANG
46	ELDER	99	ELDER	152	VANG
47	VG	100	ELDER	153	ELDER
48	VG	101	VANG	154	ELDER
49	VG	102	VANG	155	ELDER
50	VG	103	VANG	156	ELDER
51	VG	104	VANG	157	ELDER

通し番号	マーク	通し番号	マーク	通し番号	マーク	通し番号	マーク
158	ELDER	211	ELDER	264	ELDER	317	VG
159	ELDER	212	VANG	265	なし	318	VG
160	VG	213	ELDER	266	なし	319	VG
161	VG	214	VANG	267	なし	320	VG
162	VANG	215	VANG	268	なし	321	VG
163	ELDER	216	ELDER	269	なし	322	VG
164	VG	217	VANG	270	なし	323	VG
165	ELDER	218	VANG	271	なし	324	VG
166	VANG	219	VANG	272	なし	325	VANG
167	ELDER	220	ELDER	273	なし	326	ELDER
168	VANG	221	ELDER	274	なし	327	ELDER
169	VG	222	ELDER	275	なし	328	VANG
170	VG	223	ELDER	276	なし	329	VG
171	VG	224	ELDER	277	なし	330	VG
172	VG	225	ELDER	278	なし	331	VG
173	VG	226	VG	279	なし	332	VG
174	VG	227	VG	280	なし	333	ELDER
175	VG	228	ELDER	281	なし	334	VANG
176	VG	229	ELDER	282	なし	335	ELDER
177	VG	230	VANG	283	なし	336	ELDER
178	VG	231	VANG	284	なし	337	ELDER
179	VG	232	VANG	285	なし	338	ELDER
180	VG	233	VANG	286	なし	339	ELDER
181	VG	234	VANG	287	なし	340	VANG
182	VG	235	ELDER	288	なし	341	VANG
183	VG	236	ELDER	289	なし	342	ELDER
184	VG	237	VANG	290	なし	343	VANG
185	VG	238	ELDER	291	なし	344	ELDER
186	VANG	239	VANG	292	なし	345	ELDER
187	VG	240	VANG	293	なし	346	VANG
188	VANG	241	VANG	294	なし	347	ELDER
189	VG	242	ELDER	295	なし	348	VANG
190	VG	243	ELDER	296	VG	349	ELDER
191	VG	244	ELDER	297	VG	350	ELDER
192	VG	245	ELDER	298	VG	351	VG
193	VG	246	ELDER	299	VG	352	VG
194	VG	247	ELDER	300	VG	353	VG
195	VG	248	ELDER	301	VANG	354	VG
196	VG	249	ELDER	302	VG	355	VG
197	VG	250	VANG	303	VG	356	VG
198	VG	251	ELDER	304	VG	357	VG
199	VG	252	VANG	305	VG	358	VG
200	VG	253	VG	306	VG	359	VG
201	VG	254	VG	307	VG	360	なし
202	VG	255	VANG	308	VG	361	所在不明
203	VG	256	VANG	309	VG	362	なし
204	VG	257	VANG	310	VG	363	なし
205	VG	258	VANG	311	VG	364	なし
206	ELDER	259	VANG	312	VG	365	なし
207	ELDER	260	VANG	313	VG	366	なし
208	VANG	261	ELDER	314	VG	367	所在不明
209	ELDER	262	ELDER	315	VG		
210	VANG	263	ELDER	316	VG		

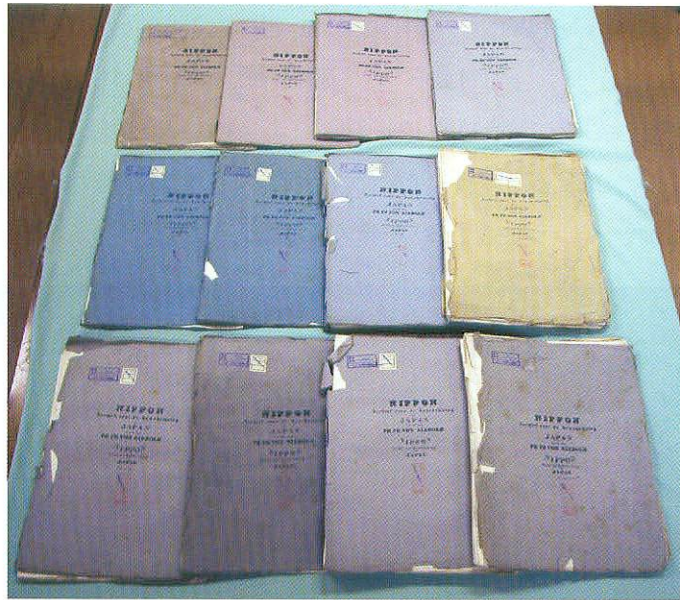
(通し番号は、雄松堂『日本』によった)

4. 『NIPPON』の構成と配本事情

九大本『NIPPON』の本文（テキスト）は、12冊に分かれている。本文編には、それぞれ配本されたときの内容目次に相当する「INHALT」（内容）が付けられている。現存する

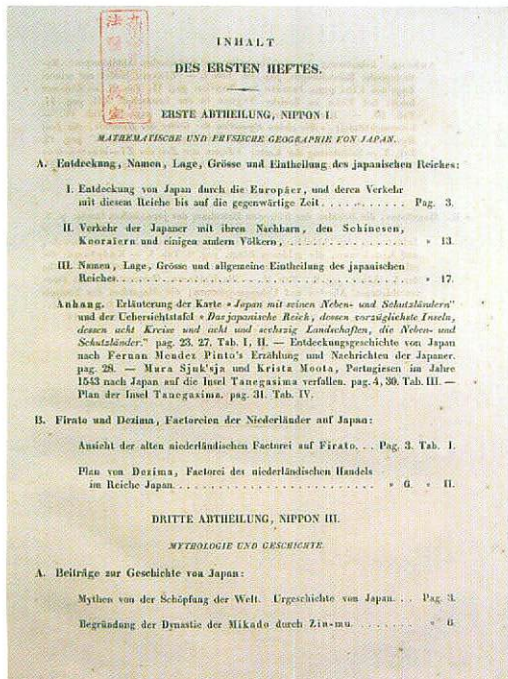


他機関が所蔵する『NIPPON』には、「INHALT」が捨てられて製本されているものも少なくないが、幸いに九大本にはすべて残っており、『NIPPON』がどのように配本されたのか貴重な情報を伝えている。



『NIPPON』本文編

九大本『NIPPON』本文編に残る「INHALT」によって、『NIPPON』が「NIPPON 1」から「NIPPON 7」の章節編成となっていることがわかる。ただし、第1章第1節から順に出されたのではなく、シーボルトの整理がついた部分からつぎつぎ出されていった様子が見える。



「INHALT」〔第1目録〕

購入者はそれまで待たなければ、「NIPPON 1」の章節が完成しなかったことになる。

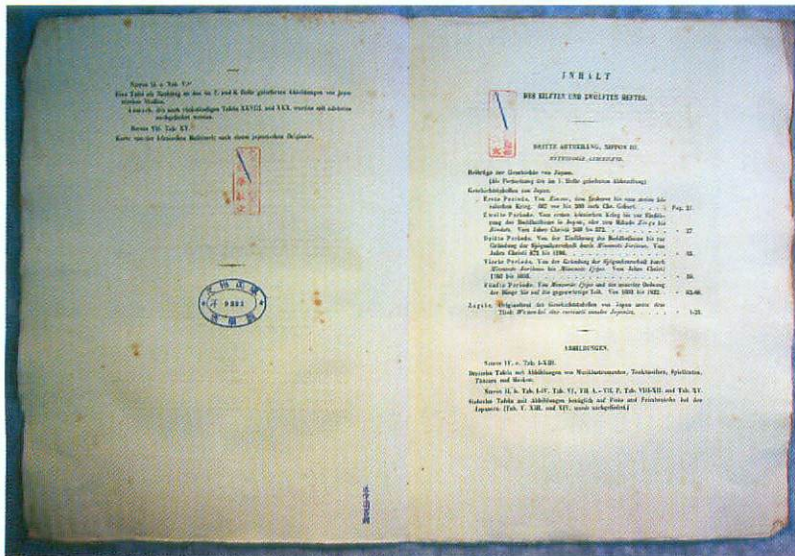
このように、章節の順序がバラバラに近い状態で配本され、しかも配られた本文と図版が対

第1回配本時に付けられた〔第1目録〕によると、「NIPPON 1」の章節編成のうちのA（「日本国の発見、名前、位置、大きさ、そして分類」）のI. II. IIIとB（「日本のオランダ商館である平戸・出島」）、そして「NIPPON 3」のA（「日本の歴史についての論文」）、そしてそれらの本文に対応する図版が配布された。図版の番号は、「INHALT」に記されている「Tab. I. II」が示している。

「NIPPON 1」の本文がどのように配本されたのか見てみると、AとBの前半は第1回配本で出されたが、Bの後半（「1832年におけるバタヴィアから日本への旅」等）は第4回配本で、Cに当たる「日本の数理・自然地理学」は、第13回配本であった。したがって、

応しないこともあった。『NIPPON』を購入した人々の苦労は大変だったと思われる。購入者たちは、完結後に、あるいは完結と思われたときに、本文・図版を並べ替えて製本せねばならなかった。

九大本『NIPPON』の本文編は、現在12冊に分かれているが、「INHALT」は〔第1目録〕・〔第2目録〕・〔第3目録〕・〔第4目録〕・〔第5目録〕・〔第6目録〕・〔第7. 8目録〕・〔第9. 10目録〕・〔第11. 12目録〕・〔第13. 14目録〕・〔第15目録〕・〔第16目録〕・〔第17. 18. 19. 20目録〕の13点ある。現存する本文の冊数は12冊、内容目次の「INHALT」は13点、これはどういうことなのだろうか。



〔第9.10目録の後半〕

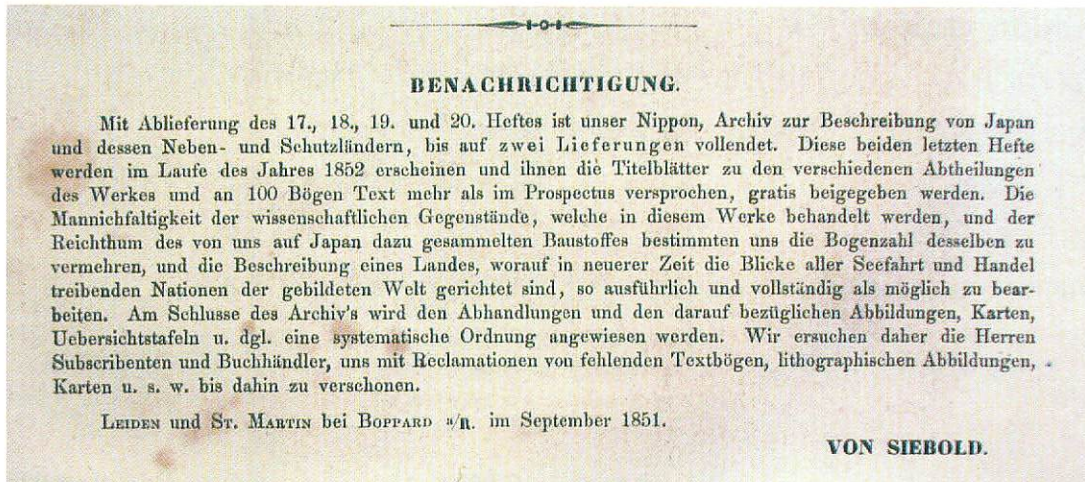
〔第11.12目録〕

本文編の標題紙には、それぞれ数字が後に書き込まれている。書き込まれた数字は1～20までであり、その数字は内部に挟み込まれている「INHALT」の番号に相当している。つまり、「1」が付された第1標題紙には、「INHALT」の〔第1目録〕が挿入されている。ところが、〔第9. 10目録〕と〔第11. 12目録〕の「INHALT」は同一の標題紙の

なかに挿入され、標題紙には「9-10. 11-12」の数値が書き込まれている。これは、第8回配本に当たる〔第9. 10目録〕と、第9回配本の〔第11. 12目録〕が同時に発行されたことを示している。決して、別々に配本された「INHALT」が一冊にまとめられたものではない。〔第9. 10目録〕と〔第11. 12目録〕は別の紙でなく、同一紙に印刷されているのである。つまり、『NIPPON』の配本は、「INHALT」から見れば13回となるが、第8. 9回配本はまとめて出されたので、回数的には12回であった。

『NIPPON』の刊行が、1832年に始まったことは明らかなが、その後どのように配本されていったのかよくわからない。ただし、第7回配本の「INHALT」（〔第7. 8目録〕）にシーボルトの報告があり、それによると、このときの年代は1839年であった。つまり、第1～7回配本までの期間は8年間であるから、ほぼ1年ごとに刊行されていたことになる。報告には、フランス語版（一部のみ）も刊行されたこと、本文と図版が対応していないことに対するシーボルトの詫言や、300枚以上の図版がすでに完成していることなどが記されている。

この時期、シーボルトは多忙であった。1834～35年にはヨーロッパ各地に出かけて日本研究の必要性を唱えながら、『NIPPON』を定期的に購入してくれる図書館等を訪問していた。



シーボルトの報告

最初はロシアを訪れ、日本で収集した地図を携えて大探検旅行家クルーゼンシュテルンに会った。クルーゼンシュテルンは、当時の常識通りにアジア大陸と樺太（サハリン）がつながっていると思い込んでいたので、間宮林蔵らの樺太図等を見せられた時、「日本人、我に勝てり」と驚嘆し、シーボルトをロシア皇帝ニコライ1世に紹介する。そしてシーボルトは、『NIPPON』をニコライ1世に売りつけることに成功した。その他、『日本動物誌』（5冊・1833～50年）・『日本植物誌』（第1巻10分冊・1835～41年、第2巻6分冊・1842～44年）の刊行も開始しており、それらの出版のために莫大な経済的負担に喘いでいたシーボルトにとって、購読者の確保は切実な問題であった。

さて、『NIPPON』の刊行がその後どうなったか見てみると、第13回配本の「INHALT」に、シーボルトの報告があり、その年が1851年であったことがわかる。つまり、第8回配本から13回配本までの期間は、1840～1851年の12年間であった。この間に6回（しかも第8、9回配本は合併配本）しか配本していないから、前半の第7回までの配本ペースに比べると、2年に1回のペースに落ちている。

第13回配本の「INHALT」（〔第17. 18. 19. 20目録〕）に書かれているシーボルトの報告には、「あと二回の配本で完成です」とある。彼は1852年中に配本すると言っているが、実現しなかった。約20年におよんだ『NIPPON』の刊行は、本文と図版のズレ、または欠落していることもしばしばだったようで、それらの苦情に対して、完了後に系統的な整理をすると述べている。しかし、シーボルト自身による「系統的」な整理はされず、購入者の混乱は収まらなかった。また、1851年以降に「蝦夷・千島・樺太および黒竜江地方」「琉球諸島」に関する部分が刊行されており、内部に「1857年5月17日」などの年号が記されていることから、刊行されたのは1858～59年頃と推測されている。

当時、シーボルトは1853～59年にボンに移り、ボン大学の構内にある公園の一角に植物園を設けてサツマイモを栽培していた。ボン大学は彼を日本研究講座の教授として招聘したが、シーボルトは自分の研究活動に専念したいという理由で断っている。そして、1859年8月には長男のアレクサンダーを連れて、2度目の来日を果たし、1862年に帰国するまで、日本の利益をは

かった開国論を展開した。

2度目の来日以前に出されたと思われる最終部分をつづった『NIPPON』は現存しているが、九大本にその部分はなく、1851年の第13回配本で終わっている。

以下、『NIPPON』本文の標題紙の写真と、そのなかに挟み込まれている「INHALT」の訳文を揚げておこう。

『NIPPON』本文の標題紙（1～20までの数字が後筆で書き込まれている）



[1]



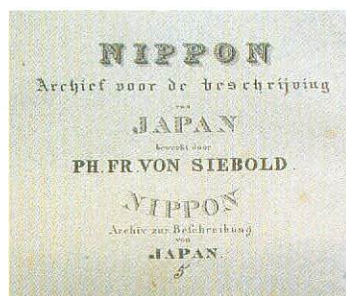
[2]



[3]



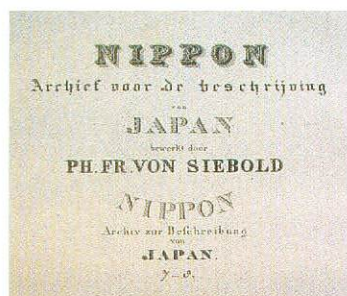
[4]



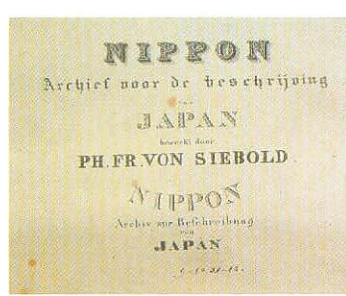
[5]



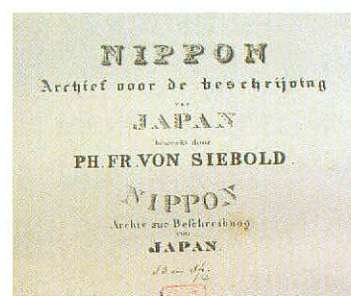
[6]



[7-8]



[9-10, 11-12]



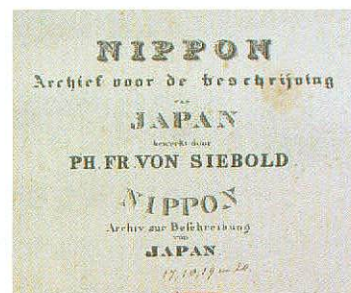
[13-14]



[15]



[16]



[17, 18, 19-20]

「INHALT」の翻訳（原文はドイツ語、少しラテン語もある）

【第1回配本】

内容

第1目録

第1部門 NIPPON I

日本における数学的・自然学的地理学

A. 日本国の発見、名前、位置、大きさ、そして分類

I. ヨーロッパ人による日本の発見、そしてその人々と国々の交流から現在にいたるまで
…ページ3

II. 日本人と中国や韓国やいくつかの民族などの隣国との交流…ページ13

III. 日本国の名前、位置、大きさ、そして一般的な分類…ページ17

付録 地図の解説「日本の近隣諸国と保護国」そして洞察「日本という非常に優れた島々、その8つの領域と68の地方、つまり近隣および保護国」ページ23. 27.Tab. I. II—フェルナン・メンデス・ピントの物語と日本の記録による日本発見史 ページ28—1543年に種子島に漂着したポルトガル人ムラ・シュクシャとキリシタ・モウタ ページ4. 30.Tab. III—種子島の図ページ31. Tab. IV

B. 日本のオランダ商館である平戸・出島

平戸の昔のオランダ人の意見…ページ3.Tab. I

日本におけるオランダの商業地である出島の図…ページ6.Tab. II

第7部門 NIPPON III

神話と歴史

A. 日本の歴史についての論文

世界の創造の神話 日本における先史時代…ページ3

神武の間の帝という王家の設立…ページ6

付録 神話や歴史の図版の解説：神話の描写 ページ10.Tab. I—神武天皇が吉備から大和への移動中、浪速付近で上陸 ページ11.Tab. II—神武天皇が紀伊国名草地方にある鳥羽に上陸 ページ11.Tab. III—神武天皇の記念碑 ページ12.Tab. IV—洞察：「空の神々の七王朝、地表の神々の五王朝、人々の支配者」 ページ12.Tab. V—地図の説明：「大和または秋津島と呼ばれる神武天皇時代（紀元前6世紀）の日本」 ページ13.Tab. VI

考古学

B. 勾玉

図版の説明：勾玉、つまり曲がった宝石と金環、つまり金の輪 ページ8.Tab. I—管玉、つまり管状の宝石と、ノロクマ、つまり琉球人の宗教用具 ページ8.Tab. II—ウシタマ、つまり雄牛でいろいろな変種と移動形態がある。住吉神社の勾玉。アイヌのシトギ ページ9.Tab. III—奇妙な種類の勾玉壺、つまり宝石をいれる壺 ページ9.Tab. IV

【第2回配本】

内 容

第2目録

第6部門 NIPPON VI

農業、工業、そして商業

- A. 日本における茶樹の栽培と茶の調合…ページ3～9
一般に栽培されている茶樹についての記述…ページ9～15
図版 I・II・IIIの説明…ページ16～17
日本の茶農園の土壌の化学的検査…ページ17～19
TH. FR. L. NEES VON ESENBECKとL. CL. MARQUARTによる

第7部門 NIPPON VII

日本の近隣および保護国

A. 高麗の情報

- 高麗漁夫の絵…ページ3～6
日本の海岸に漂着した高麗商人たちへの訪問…ページ6～9
言葉と文字…ページ10～17
高麗人、対馬の日本の武士および役人、釜山の日本人商館からの雑多な情報…ページ17～28
用語索引…ページ29～44
補遺. 高麗語・日本語・中国語の用語索引…ページ1～8

図版の解説

- Tab. I. 漁夫の家族
" II. 日本の接待場所における高麗商人と船員
" III. 沿岸航行船
" IV. 船頭
" V. 商人
" VI. 水夫
" VII. 水夫見習い
" VIII. 金到潤、彼は学者である
" IX. Hosatsiem、彼は商人である
" X. 高麗文字の字音表
" XI. 8区分された高麗、原図には「朝鮮八道之図」とある
" XII. 1. 2. 上着とズボン；3. わらじ；4. 髪櫛；5. 5.a. 真鍮の煙管；
6-9. 仕切り
" XIII. 1. 2. 3. 仏教の偶像；4. 太鼓、これを用いて祈る；4.a. ばち；
5. 6. 7. 8. 土製や磁器製の容器
" XIV. 新旧の高麗の通貨

【第3回配本】

内 容

第3目録

第2部門 NIPPON II

民族と国家

A. 日本の住民の記述

日本人やいくつかの別種族における日がつりあがっていることへの検討…ページ1～6

注釈 この論文に日本人といくつかの別の民族の一連の肖像が続く、前者はaと、後者はb と表示した。

図版の説明

- Tab I .a 若い日本人男性名前「こまき」の肖像
" II .a しもり 若い日本人女性
" III .a 日本の少年
" IV .a 日本の少女
" I .b 目の形の図、1と6は日本人、2は高麗人、3は中国人、4はブギース人
5はダイヤク
" II .b 中国人 郭成章
" III .b 同一人物の側面（この肖像は追加されたものである）
" IV .b ブギース人 ORSON

第5部門 NIPPON V

日本における神々

日本における神々の神事（神道）、仏教（仏道）、孔夫子の教え（儒道）についての歴史的概観
ページ1～8

日本列島の住民古来の祭式である神事（神道）の概要 ページ9～35

日本における仏教の低俗な宗教祭式である偶像崇拜 ページ36～38

「傳大士」、伝説の偉大な祖師 ページ38～40

釈迦 生涯の4つの時点における描写 ページ40～44

九種類の姿をした阿弥陀（九品弥陀） ページ44～

図版の説明

- Tab I . 1. 仏陀の彫像の図 日本に取り入れられた最初の偶像 2. 3. 聖徳太子、
彼は最初の日本における仏教の祭司者、その青年期と僧侶期
4. 菩提達磨、彼はヒンディスタンにおける28の仏教の太祖 5-14、日本
における仏教の非常にすぐれた宗派の創設者
" II . 菩提達磨、日本の原画による西インドへの巡礼
" IV . 1. 聖なる書籍の保存箱 2. 3. 宗教の本、経（king）
" V . 仏教の創始者の釈迦（仏陀）、子供時代、荒野での修行時代、教祖時代
の描写

- ” VI. 釈迦の死、有名な日本の原画より
- ” VII. 九品の弥陀
- ” VIII. いくつかの他の偶像
- ” IX－X. 七仏薬師とその他の奇妙な偶像

付録 仏像の装飾の測定、日本の『仏像図彙』から引用したもの、あるいは
女神像を寄せ集めたもの（38ページについて）

【第4回配本】

内 容

第4目録

第1部門 NIPPON I

陸上、海上紀行

- B. 1823年におけるバタヴィアから日本への旅
 バンカにおける地理や統計に関する記述の小編…ページ20
 1662年の中国人国姓爺の台湾征服…ページ48

図版の説明

- Tab I. ミュントクの景色、ミュントクの投錨地の図とバンカ海峡の南の入り口
 " II. バンカ島の地図
 " III. 台湾海峡の海図
 " IV. 長崎湾の図
 " V. 長崎の港と湾の眺望
 " VI. 長崎における港と周辺の地図
C. 次のようなタイトルの日本国の原図：日本輿地路程全図から描いた日本の島々
Tab I. それに属する小さな島々をともなって日本島の西の部分である九州
 " II. 日本島の中心部分の隣にある四国島
 " III. 日本島の東部
 " IV. 日本島の北部

第4部門 NIPPON IV

技術と学問

- A. 日本国における長さ、面積、寸法や重量、貨幣単位

図版の説明

- Tab I. 様々な計量単位の分類と名称の一覧
 " II. 度量衡
 Fig.1. 2. ものさし ツネサシ
 " 3. 立方ものさし イチゴウ
 " 4. サケマス (酒の計量器)
 " 5. イッショウ 5.a. それに付属するマッチ
 " 6. トマス
 " 7. 7.a. 8. 金属または金の台
 " 9. ヨコハカリ (横の台)
 " 10. テンピン a. 重り、フンドー
 " 11. 銀硬貨のかたまり、イタカネとゴダマ
 " 12. 金の結びひも
 " 13. 紙幣、ギンサツ 13.a. その裏側

【第5回配本】

内 容

第5目録

第2部門 NIPPON II

陸・海の旅

1826年における将軍の宮殿へ向かう旅

I 章 通常に行われる江戸への参府旅行の概容、参府の公使である在日のオランダ商館の理事のために批判的に書かれた手引き…ページ1

II 章 1826年江戸参府旅行の序文…ページ31

III 章 長崎から小倉までの旅行…ページ50

図の説明

Tab. I. II 旅行用具

- // III. 荷を運ぶ牛と馬、人足と旅人
- // IV. オランダ使節団の行列
- // V. 江戸への街道
- // VI. 大村湾を望む彼杵の景色
- // VII. 大村湾へ流れる郡川の景色、大村への山道
- // VIII. 小田の馬頭観音堂、彼杵付近の楠
- // IX. 馬頭観音像
- // X. 嬉野温泉
- // XI. 小倉の橋からの引島（彦島 ※訳者注）の景色
- // XII. 与次兵衛瀬の碑、鳴戸の大渦
- // XIII. 下関の街
- // XIV. 竹崎の風景
- // XV. ファン・デア・カペレン海峡（関門海峡 ※訳者注）の景色
- // XVI. ファン・デア・カペレン海峡（関門海峡 ※訳者注）の地図
- // XVII. 陸の風景

【第6回配本】

内 容

第6目録

第2部門 NIPPON II

陸・海の旅

D. 1826年における将軍の宮殿へ向かう旅

Ⅲ章 長崎から小倉までの旅行（続き） ページ53～88

注釈、Ⅲ章の旅の図版はすでに第5分冊の地図集に添えられている。それには山地、火山、奇妙な山、そして肖像画のシリーズを示している。その図版類は、最初「日本」の刊行の最中に論議されているのだが、にもかかわらず、私たちが描写した土地と民族についての明確な記述をわれわれの旅の読者に提供している。

図の説明

Tab. I. 上野国の妙義山

- // II. 箱根山の街道風景
- // III. (山城国における) 大井川から愛宕山の風景
- // IV. 陸奥国の吾田多良山
- // V. 陸奥国の小野岳の柱状玄武岩の溪谷
- // VI. 信濃国の死火山御嶽の風景
- // VII. 加賀国の白い山、白山と日向国にある霧島火山
- // VIII. 信濃国の火山浅間山、肥後国の火山阿蘇山
- // IX. 出羽国の死火山鳥海山ととかく風評のある富士山
- // X. 両方とも陸奥国にある死火山巖鵬山と巖木山
- // XI. 陸奥国の御駒岳、伯耆国の大山の巨大な像
- // XII. 御嶽火山と雲仙岳の風景
- // XIII. 陸奥国の金華山の山脈前部、讃岐国の五剣山
- // XIV. 奇妙な形をした岩山
- // XV. 信濃国の久米の岩橋、相模国の走水の岩門
- // XVI. 富士山の火口

肖像画

- // X. VI. 長崎近郊の百姓、くまそ・おとみ
- // VII. 長崎の少女、いとせ・そのぎ
- // VIII. 出島の通訳学校の学長、石橋助左衛門
- // IX. 長崎の女性市民、おたくさ

【第7回配本】

内 容

第7. 8目録

第7部門 NIPPON VII

高麗についての報告

最後の部の第2分冊の続きと終わり

1645年韃靼海岸に漂着して北京に送られ、それから朝鮮を経て故郷に帰された日本人の漁民による高麗についての報告 ページ45

高麗の国の制度、官吏と宮中の役人 ページ57

中国単語の「類合」の高麗語訳と中国語の朝鮮読み併記、校訂のドイツ語訳、ページ61

日本の文献による日本と高麗半島、日本と中国の諸関係

a. 高麗半島の歴史の一般的な概容 ページ83

b. 日本の文献から見た日本と高麗半島と中国の関係の編年記 ページ103

図の説明 Tab.I～XIVは第2分冊の中に出て、Tab.XV以降は次に出るであろう。ページ153

付録 高麗と中国の語句の目録の続きと終わり

図解

41個の図は日本の武器と軍事演習、花瓶と青銅器である

報告

『日本紀行』という題でフランス語版が出版されたことにより、『日本』の初めの6分冊には部分的にしか発行されていない論文を完成させなければならなくなっていました。それは第7, 8分冊の発行が非常に長く延期してしまったためで、今回の「銃及び刀の柄」の図版に対応する本文を、次の配本で引き続き発行しなければなりません。これからは『日本』の出版も早く進行し、この最も困難な仕事も解決できるでしょう。300枚以上の図版も完成しています。

1839年 ライデンにて

フォン シーボルト

【第8回配本】

内 容

第9. 10目録

第2部門 NIPPON II

民族と国家

武器、武術、戦術について

武器について…ページ3

地下壕について…ページ33

人工の障害物について…ページ34

攻城戦における攻撃と防御の武器と器械について…ページ36

日本列島の原住民の石の武器について…ページ43～52

13号に続く

陸と海の旅

長崎から江戸への旅

長崎から小倉へのルートの短い地理的、統計的なメモの概容…ページ83～107

第7部門 NIPPON VII

日本の近隣諸国と保護国

高麗の報告

第2、7、8分冊に提供された論文の寄稿

1000の言葉の千字文…ページ165～191

図解

NIPPON II .e. Tab. I –XXV

これら26個の図は日本人の服装とトイレ器具等々

NIPPON II .g.Tab. I –XII

これら12個の図は日本人の風習や慣習について

NIPPON II .c.Tab. V .ter

この図は日本の武器の第7. 8分冊の補遺

注釈 まだ出ていないXXVIII. XXXはすぐ次に追加するであろう

NIPPON VII. Tab.XV

高麗半島の地図は日本のオリジナルである

【第9回配本】

内 容

第11. 12目録

第3部門 NIPPON III

神話・歴史

日本の歴史についての報告

(1号の最後の論文からの続き)

日本歴史年表

第一期. 征服者神武天皇から最初の高麗戦争まで。紀元前667年から紀元200年まで…ページ21

第二期. 最初の高麗戦争から仏教伝来、神功皇后から敏達天皇まで。200年から572年まで…
ページ27

第三期. 仏教伝来から源頼朝の将軍支配の確立まで。572年から1186年まで…ページ35

第四期. 源頼朝の将軍支配の確立から源家康まで。1186年から1603年まで…ページ59

第五期. 源家康とその新秩序の建設から現在まで…ページ82～88

付録. 「日本歴史年表」のオリジナルテキストのタイトルは「Wanenkei (和年契) sive
succincti annales Japonici」…ページ1～25

図版

NIPPON IV. c. Tab. I – XIII

これら13個の図は楽器、作曲家、楽隊、踊り手、仮面を付けた人である

NIPPON II. h. Tab. I – IV, VI, VIIA – VIIIF, Tab. VIII – XII, Tab. XV

これら17個の図は日本人の祭りと休日の慣習に関してである

(Tab. V, VIII, XIVは近々出るであろう)

NIPPON II. a. Tab. X – XIV

これら5枚は肖像である

Tab. Xは江戸への参内の通訳である名村三次郎 (1829年)

Tab. XIは学者の最上徳内

Tab. XIIは長崎から来た79歳のおばあちゃん (ばばさん)

Tab. XIIIはお坊さん (ぼうずさん)

Tab. XIVは将軍義政 (1449～72) これらは日本人の画家によって描かれた

地図類

原図と日本人による天体観測に基づく日本の国土地図、九州・四国・日本

「Grand Aigle」形式による図面

【第10回配本】

内 容

第13. 14目録

第3部門 NIPPON III

神話・歴史

日本歴史への寄稿

(1. 11. 12号における救いようのない論文の帰結)

日本歴史年表

事項索引…ページ89

名簿…ページ92

アルファベット順の日本の年号索引…ページ99

付録

I. 日本の年代計算法について…ページ101

II. 一年の区切り方…ページ111

III. 中国人と日本人の時間について…ページ119

IV. 暦について…ページ135

V. いわゆる盲暦について…ページ143

VI. 花暦について…ページ149

VII. 図表・図版の説明

図解

NIPPON III. Tab. VII. VIII. IX. X. XI

これら五つは前述の論文に関する図表である

NIPPON V. Tab. L I – LXXV と Tab. LXII. A

これらの25個の図は神道・仏教の寺、司祭・僧侶の服装、巡礼者、尼僧、乞食、神器、葬式場と墓についてである

注釈 これらの図は日本における宗教的建造物に関連している。それによって、Tab. I ～ X の10個の図はすでに第3分冊に関連するテキストとともに報告されているのだが。Tab. XI ～ L はそれに関連するテキストとともに、2つの連続した分冊から構成され、40枚の図のシリーズにおいて、体系的・具体的な描写が、すべて日本の仏教における尊敬される偶像、崇拝される聖者等々について提供されるだろう。

NIPPON II. Tab I ～ X. Lita. i

10個の図は建設物の図である

【第11回配本】

内 容

第15目録

第2部門 NIPPON II

陸と海の旅

1826年における将軍の宮殿へ向かう旅

IV章. 小倉から下関への渡航と下関での滞在…ページ108～129

V章. 下関から室への海の旅と室での滞在…ページ130～146

図解

これら16個の図はNIPPON II. dの図である

Tab.XVIII. 阿弥陀寺の風景

// XIX. 1. 上関、2. 沖の家室、3. 軀、4. 阿伏兎、5. 兵庫の風景

// XX. 上関の港、日比の製塩所

// XXI. 室明神の神社

// XXII. 1. 須磨寺、2. 曾根の松、3. 相生の松

// XXIII. 石の宝殿の碑

// XXIV. 勇士敦盛の墓石 石の宝殿からの風景

// XXXI. 西本願寺の風景（都）

// XXXII. （都の）祇園神社

// XXXIII. （東海道の）瀬田川と瀬田橋の風景

// XXXIV. （東海道の）琵琶湖の風景

// XXXV. 矢矧橋

// XXXVI. 箱根の湖水を望む風景、富士山と富士川

// XXXVIbis. 大井川の人足、わたしもり

// XXXVII. 1. 馬入川 2. 安部川 3. 富士川 4. 天竜川

// XXXVIII. 永代橋からみた江戸の港と街の風景

注釈 図XXV～XXXまでは、次に出版される分冊の宮殿への旅行の章の終わりに載せるであろう。この分冊で挿絵数を完結させることとなる

NIPPON IV. b. Tab. I と I bisは狩猟の図、Tab. II は漁獵の図、Tab. III は鯨漁の図である

【第12回配本】

内 容

第16目録

第6部門 NIPPON VI

農業、工芸、貿易

日本の貿易

- I 章. 対外貿易の制限と対ヨーロッパ通商関係途絶の結果の国内産業の発展
…ページ1～5
- II 章. 日本におけるオランダ貿易の始まりから現在まで…ページ6～35
- III 章. オランダ人の航海と貿易。対外貿易の手配、特にオランダ商人の貿易事務所。
輸入品と輸出品、日本におけるオランダ貿易の現状と将来の展望に関する評価
…ページ36～45
- IV 章. 日本と中国の貿易…ページ46～54
- V 章. 日本とその保護国・近隣諸国：高麗、琉球、蝦夷、南千島列島、樺太の貿易
…ページ55～59
- VI 章. 国家の物質的救済手段、生産的・工業的・商業的階級、国内産業
…ページ60～64

NIPPON II.a

肖像画

Tab.XV. 通訳 W. J. Tilestusによるオリジナルスケッチ

- // XVI. 役人と武士、同上
- // XVII. 日本人の様相、同上
- // XVIII. 日本人の様相、日本人画家、といおすけ (Toioske) のスケッチ

NIPPON II.f

Tab. I ～IV. 家具

- // V～VII. 食事道具
- // VIII～X. 飲み物の道具
- // XI. 果物の籠
- // XII. 台所用具

NIPPON VI

Tab. I ～II. 農場と農業の施設

NIPPON III

Tab.V. 銀貨・金貨

- // VI. 年代順の銅貨・鉄貨

【第13回配本】

内 容

第17. 18. 19. 20目録

第1部門 NIPPON I

日本の数理・自然地理学

日本とその近隣諸国・保護国の海域におけるヨーロッパ人の発見の歴史的概容
…ページ57～122

日本の自国の領土とその近隣諸国・保護国についての日本人の発見の歴史的概容
…ページ122～145

注釈…ページ146～174

第5部門 NIPPON V

日本の神

日本のブッダ（仏像図彙）、日本のオリジナルからの翻訳とホフマン博士により提供された注釈
付…ページ45～186

第6部門 NIPPON VI

農業・工芸・貿易

日本の貿易について

第6章 国家の物質的救済手段、生産的・工業的・商業的な人々の階級 続き
…ページ65～72

第7部門 NIPPON VII

日本の近隣諸国と保護国

蝦夷・千島列島・樺太・黒竜江地方

日本人間宮林蔵の東タタリアへの旅

I 章. 蝦夷から樺太を経由して東韃地方のデレンまでの旅…ページ167

II 章. デレン滞在と交易所の記述…ページ173

III 章. マンコー河と、東韃と樺太の海峡を通る旅…ページ176

IV 章. マンコー河またはコントンコー河についての短い記述…ページ178

V 章. 樺太と黒竜江地方の政治に関する覚え書き…ページ179

VI 章. 南樺太地方の原住民の生活様式・風習・慣習についての記述…ページ182

VII 章. ヲロッコについての情報…ページ189

VIII 章. スメレンクル人について…ページ191

注釈…ページ197～204

図と地図

NIPPON I. b. Tab.III. 17世紀のオランダの大部分手書きの海図を元にした中国と台湾の沿海の地図、Tab.V. 1643年M. G. フリース、1639年クワストとタスマン、1791年J. コルネットの発見と航路の地図、1596年リンスホーテンによる日本地図、Tab.VII. 日本の南、南西海図（九州とその周囲の島々）

NIPPON II. i. 建造物：Tab.XI～XIII、民家 Tab.XIV～XV. 農家

NIPPON II. k. Tab. I～V. 鷹狩り・鷹・鷹狩りの道具

NIPPON IV. a. Tab.V. 外科の器具

NIPPON V. Tab.XI～XLとXXXVIII. b. 30個の図は日本の神々についての図

NIPPON VI. a. Tab.X. 酒・醤油・紙・漆造りの道具

NIPPON VI. b. Tab.IV. 瓦職人と陶工の道具、Tab.IX. 指物師や大工の道具
Tab.X II. 船

NIPPON VI. Tab.III. 農家と農業、Tab.VI. 農具、Tab.VII. 農具

NIPPON VII. Tab.XVI. アイヌと住居

Tab.XVII. アイヌのオムシャ祭り

Tab.X VIII. アイヌの貢物と商品

Tab.XIX. 蝦夷のアイヌの武器と道具

Tab.XX. 樺太のオロッコとスメレンクルの一族

Tab.XXI. 樺太の衣服

Tab.XXII. 樺太の武器と道具

Tab.XXIII. アイヌ、オロッコとスメレンクルの船

Tab.XXIV. 蝦夷と日本領の千島列島の地図

Tab.XXV. 樺太とマンコー河の河口の地図

Tab.XXVI. ファン・ディーメン海峡とリンスホーテン諸島の地図

Tab.XXVII. 琉球列島の地図、北の島

Tab.XXVIII. 琉球列島の地図、真ん中の島

Tab.XXIX. 琉球列島の地図、南の島

報告

第17, 18, 19, 20分冊の発行で『日本、日本及びその近隣・保護国に関する資料集』はあと二回の配本で完成です。この最後の二回の配本は1852年中に出版されますが、これには本書の諸編の前に付ける標題紙と、発刊案内で約束したものよりも100枚多い本文が無料で添付されます。本書で取り扱われる学問的対象が多岐にわたることと、その目的のために我々が日本で募集した資料の豊富さが、我々に紙数自体を増やす気にならせましたし、近年文明世界のうち、航海と貿易に従事する国々の注視的となっている国についての記述はどうしてもできる限り詳細かつ完全に論述せざるを得ません。この資料集が終わります際、論述と、それに関する図版、地図、一覧表などとの間に、系統的な秩序が与えられるでしょう。予約購読者及び書店各位には、欠落している本文や石版刷図版、地図などについてのご苦情は、それまで何卒ご容赦下さい。

1851年9月 ライデンとボッパード郊外セント・マルチンにて

シーボルト

(翻訳者 福岡県立図書館 滝口由美子)

5. 『NIPPON』図版の構成



『NIPPON』図版の一覧

九大本『NIPPON』図版は、14冊に分かれている。それぞれに標題紙がついており、後筆で20までの数字が書き込まれている。本文編の場合、〔第17～20〕が一冊にまとめられたのに対し、図版の場合は〔第17. 18〕と〔第19. 20〕が分冊となっている。これらは、第13回配本時に同時に配られており、そのことは「INHALT」からもわかる。

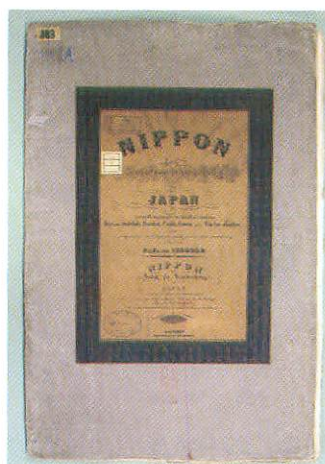
結局、7章編成の『NIPPON』は、当初は順調に1年に1回のペースで、本文と図版を対応させながら配本されていたが、しだいに対応は崩れ、2年に1回、しかも合併号となっていった。

個人的経験であるが、1年に3回刊行する予定の研究雑誌の刊行が遅れてしまい、苦肉の策として合併号を出し、号数を稼いだことがある。いくらかシーボルトの気持ちもわかる。

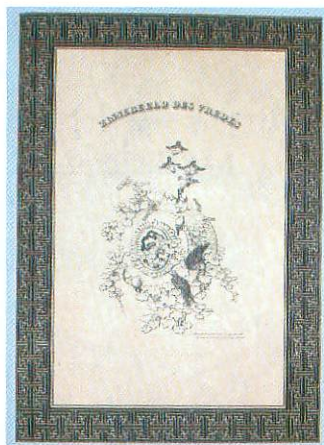
図版は「INHALT」にあるように、「NIPPON 1」の「Tab 1」から順に配本されたわけではない。しかし現在、九大本の図版は標題紙に挟まれて、順に並べられている。これは、本文編とくらべると、その順序が確定しやすかったことによるとと思われる。再発見時には、おおむね順番に並べられていたので、簡単な誤りの部分を直して並べ替えた。その際は雄松堂の日本語版『日本』を参照し、図版の裏に通し番号を付している。

以下、各冊にどのような図版が含まれているのか、概要を示す。

第1冊の仮表紙は、第2冊以降の仮表紙と異なっている。これに入れられた図版は、全体に対



(表)



(裏)

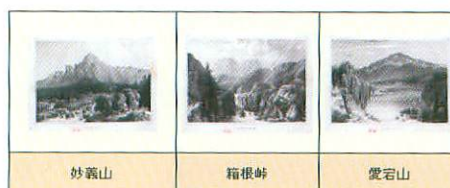
する口絵と14点の図が収録されている。長崎や出島の風景、日本および周辺諸国の地図などが収録されている。

第2冊以降には、本文編と同じように、後筆による数字の書き込みがある。



(2)

第2冊には日本各地の山々のスケッチを中心とする20点の図版が収録されている。シーボルトが見ていない山々も多く描かれている。



(3)

第3冊には、長崎においてシーボルトと関係を持ったと思われる人々のスケッチなど22点の図版がある。



(4)

第4冊には、石器時代から江戸時代までの武器・防具および兵士や戦いの様子を描いた31点がある。





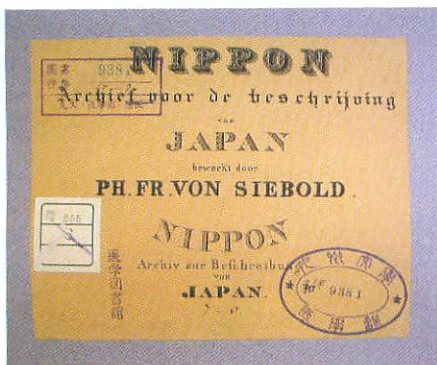
〔5〕

第5冊には、旅行諸道具のスケッチとともに、長崎から江戸までの参府旅行途中の日本各地の名所・風景のスケッチなど36点が収録されている。ただし、九大本に「京都の全景」と「江戸の全景」は欠けている。



〔6〕

第6冊には、町人・農民・天皇・将軍などさまざまな身分の人々を描いた26点が収録されている。



〔7-8〕

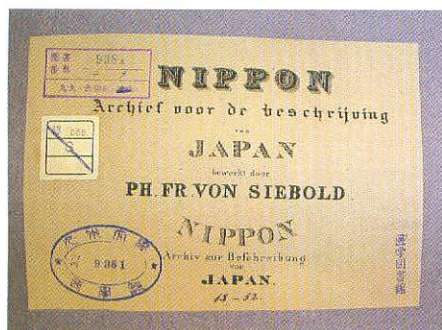
第7・8冊には、当時の生活諸道具や礼儀作法、冠婚葬祭に関する場面が描かれた24点がある。



〔9-10〕

第9・10冊には、1年間のさまざまな節句や祭礼、仏殿・屋敷などの建造物、鷹狩りなどの31点がある。





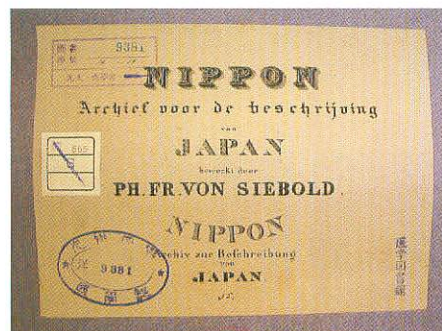
[11-12]

第11・12冊には、神武天皇の事績・歴代天皇、鎌倉～江戸にかけての歴代将軍、時計・暦、勾玉・金環などの考古学的遺物や貨幣といった、17点の絵がある。



[13-14]

第13・14冊には、日本の度量衡・花器・楽器など、日本の文化に関する27点の図版がある。



[15]

第15冊は、仏教に関するもので、仏教各宗の祖師や釈迦および仏教の神々を描いた30点がある。



[16]

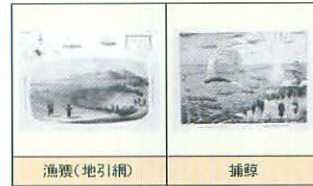
第16冊には、寺院・神社、僧・神主の姿などの宗教に関する36点の図版がある。





(17-18)

第17・18冊には、農業・農具、職人の諸道具、狩猟・漁業など産業を描いた図版が16点ある。



(19-20)

第19・20冊には、朝鮮の人々や蝦夷・樺太の人々、その服装や習俗、蝦夷・樺太・琉球・日本の地図など31点がある。



[注]

- (1) 藤田喜六「NIPPONの書誌学的検討」(『シーボルト「日本」の研究と解説』、講談社、1977年)、斎藤信「シーボルト"日本"の最終刊行年とその全体構想について」(『シーボルト日本』、雄松堂、1979年)。
- (2) ヨーゼフ・クライナー「三人のシーボルト」(同編『黄昏のトクガワ・ジャパン』、NHKブックス、1998年)。
- (3) 日蘭学会監修『NIPPON (復刻版)』6巻、講談社、1975年、岩生成一他監修『日本』9巻、雄松堂、1977-79年。
- (4) 呉秀三『シーボルト先生 1. 2. 3』(東洋文庫、1967年)をはじめ、板沢武雄『シーボルト』(人物叢書、吉川弘文館、1960年)や『シーボルトと日本』(1988年)、『ヨーロッパに眠る日本の宝 -シーボルト・コレクション-』(1990年)、『シーボルト 日本の旅する』(1996年)、『シーボルト家の二百年展』(1996年) など多くの展示図録がある。